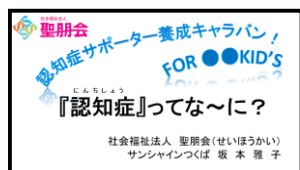


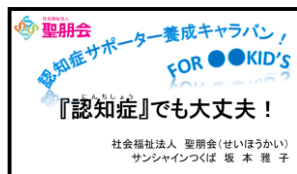
子どもたちと作る 『認知症になっても大丈夫な町』

所属：社会福祉法人聖朋会
特別養護老人ホーム サンシャインつくば
氏名：坂本雅子（茨城県・12期）
作成日：令和元年12月26日
※ 写真の使用については本人に同意を得た

取り組みの概要



から



へ

認知症カフェでの「孫が認知症じゃないのって…。嫌なんだよね」というつぶやきをきっかけに、な～に？で終わらない、大丈夫な町を子どもたちと作れるかもと考えた！

子どもの力は伝染する！ 教室から家庭へ・地域へ



教職の経験を活かし、小中学校での外部講師（外部資源の活用）として社会科や家庭科、キャリア形成や職業選択、総合的な学習として授業をさせてもらってきた。

平成28年からは地域包括支援センターと共同で市内のすべての小中学校で認知症サポーター研修を実施している。内容は学校や地域の実情に応じ変更しながら子どもたちが理解できるものにしていく。

「学校や地域の実情」というのは易いが、学校も地域も「統合」という名のもとに刻々と変化している。地域ってどこなのか…を自問自答しながら行っている中で出会った言葉が、認知症カフェでの「孫たちも学校で認知症の勉強してるんだね」「でも嫌なんだよね。すぐに認知症って言われて。悪化するばかりの怖い病気になってしまったようで、落ち込むわ」というつぶやき。認知症ってどんなものなのか、病気として伝えるだけではかえって落ち込む人すらいる。なんだか少しわかっただけではちっとも変わらない。大丈夫にしなければと考え、今こそ子どもの力が活かされると直感した。

同時に、スタッフにも声をかけ、サンシャイン劇団を結成。事務、総務、管理栄養士、相談員、介護職員みんなでワイワイと場面を想定し観察し練習した。副次的成果として、職員の洞察力が高まったことはもちろんである。場面を劇団員の演技で見ることにより、子どもたちの考え方も広がり、深まっていくことも実感できた。落ち着くようにその場が安心するようという対応から、本当はどうしたいの、本当に不安なことを減らせなかったら安

心できないという考え方をするようになってきた。
また、この相手の本当の思い、言い出せない気持ちに気付こうとすることは、子ども同士のかかわりにも小さな一石を投じていると担任教諭から聞いた。

枠にとらわれない子どもの発信力は、きっと大人にも届くと考えている。

地域の概要

茨城県かすみがうら市 (118.77km²)
霞ヶ浦町と千代田町が合併し2005年誕生

- ・人口：41,768人
- ・65歳以上人口：12,710人 (高齢化率30.4%)
- ・日常生活圏域：2圏域
- ・地域包括支援センター：1か所
- ・認知症地域支援推進員：4人
- ・主要産業：農業 (レンコン生産日本一)
- ・周囲三方を霞ヶ浦に囲まれ、一方は筑波山に連なる。土浦・つくば・かすみがうらサイクリングリゾートとしての再開発中
- ・若年人口の減少により、中学校、小学校の統合が進む
令和元年12月1日現在 3中学校 (1,055人) 8小学校 (2,024人)



メモ

- ・日常生活圏域は、旧市町村で2としているが、実際は3と考えられる。(旧町2とギュッと細くなっている神立駅周辺…その小学校2と中学校2で市内児童生徒数の54%)
- ・霞ヶ浦地区の小中学校統合は完了 (中学校2→1へ) …PTA会長で統合委員会委員長でした (笑)
小学校も中学校から3年遅れで7校→2校へ
- ・2022年4月には4小学校と中学校1校が統合し小中一貫校 (義務教育学校) となる準備が進められている。地域が現在進行形で変化しつつある。

法人・施設紹介



社会福祉法人 聖朋会（せいほうかい）

・1987年9月設立「地域に役立つことをとことん考え、行動し、私たちは地域の資源となります」を理念として活動中

・ロゴマークは、地域の人と支え合うこととその時々揺らぎにとことん付き添うことをイメージ（芸術学部大学生ととことん打合せをし作成）

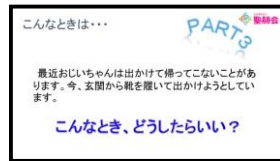
・実施事業：特養・ショートステイ・地域密着デイ・認知症デイ・認知症カフェ・配食・支援センター・ケアプランセンター/保育園・子育て支援センター・子ども一時預かり・放課後児童クラブ

・聖朋会の一員として、地域に役立つ取り組みと位置づけ。小中学校での学びの場（授業）に積極的に参画（管理栄養士、運動指導士、男性保育士等含む）

- ・坂本だけが授業等に出ているのではなく、学校で必要とする社会人枠の授業には結局的に協力する。
- ・進路指導、職業選択の授業や男女共同参画の授業、等々 他に学校からの体験受け入れ時の説明等は誰でもできるように！がモットー。

活動紹介

- ・D小学校（平成28年～毎年実施）写真は令和元年11月実施
- ・対象：5年生 時間：2単位90分の授業（総合的な学習の時間として実施）



- ・ペアで考え、その理由も含めロールプレイで発表：
- ・田んぼを見に行きたいというおじいちゃんを心配した孫が「この前植えた庭の花を見に行こうよ」は良くない対応と。おじいちゃんは田んぼが見たい、稲の様子やお米の出来具合が心配だから見たいのに、庭の花を見ても心配はなくなる。だから良くない対応と考え、一緒に田んぼまでいけないのなら、わかりやすく伝えてごめんねって言い、いつならいけるかを伝えたほうがおじいちゃんは納得するんじゃないかな。と

・少人数のクラス、毎年5年生で授業をしていく中で、気づきや思考が深まっている。

目の前のことだけに対応し、穏やかになることが大切から、それも大切だけど、本当はどうしたいんだろう。本当に心配なことややりたいことでないのに納得いかないかもしれない…等の意見が出るようになっていく。…おじいちゃんが田んぼが心配だから見に行きたいと外に行く理由を設定したペアは、「この前植えた庭の花を見に行こう」と行き先を変えようとした。自分で植えた花なのでそれでもいいかと最初は考えたが、更に考えてみると、それでは田んぼの心配は解決しないことに気付いたと発表。稲が育っているか、水はちゃんとあるか等、これまでおじいちゃんがやってきたことから心配は出ているんだから、別のことをやっても気持ちはすっきりしないと思うと発言した。

・終わった後の感想では、認知症の理解から自分事の気持ちの理解につながり、言い出せない気持ちを考えて話したり、聞いたり、行動したりすることは誰にとっても大切との意見が出た。…すごい感動！！ 学校、先生方の、地域の人づくりに感激！！ しています。

活動紹介

- ・C小学校（平成29年～毎年実施）写真は令和元年12月実施
- ・対象：6年生 時間：2単位90分の授業（総合的な学習の時間として実施）

時間	活動内容	指導内容
10分	自分たちに思いがけず起こった出来事について話し合う。	出来事について話し合う。出来事について話し合う。出来事について話し合う。
20分	自分たちに思いがけず起こった出来事について話し合う。	出来事について話し合う。出来事について話し合う。出来事について話し合う。
40分	自分たちに思いがけず起こった出来事について話し合う。	出来事について話し合う。出来事について話し合う。出来事について話し合う。
10分	自分たちに思いがけず起こった出来事について話し合う。	出来事について話し合う。出来事について話し合う。出来事について話し合う。
10分	自分たちに思いがけず起こった出来事について話し合う。	出来事について話し合う。出来事について話し合う。出来事について話し合う。



- ・ペアで考え、ロールプレイで発表：「夜中におばあちゃんが電気をつけて大きな音でテレビを見ています…」
- ・認知症で時間がよくわからないのかもしれないよ。今は夜の11時だよって伝えよう。
- ・時間が間違っているだけじゃなくて、本当に耳が聞こえづらいのかもしれない。この頃どうかをみんなで確認しようよ。
- ・いきなりテレビを消すことは絶対やめたほうがいい。何も言わずに消されたら誰だって腹が立つし、訳が分からないから…。

- ・子どもたちの考え方は回を重ねるごとに目の前の見えていることから、それはなぜ、自分だって同じ…と広がっていく。

・始めたころの授業（写真の学校以外も含む）では、認知症についての理解の内容から、『障害』の部分が強くと印象に残り、記憶が保てなくなる、時間が分からなくなる、怖いというネガティブな後味になることも多かった。

（そういう授業になってしまったと反省）

・今年の授業での発言等からは、認知症の理解をできないこと、怖いこととだけとらえるのではなく、だから…と前向きに（ポジティブに）とらえている印象があった。夜中であるという時間が分からないのは、電気をつけて明るいから。今は夜の11時だよと伝えれば、夜だとわかるのではないか。だったら、夜遅いということが分かるように伝えられればもう寝ようかとなるのかもしれない…というような発言があちこちで聞かれた。また、認知症ということだけから考えるのではなく、本当に体調が悪いのかもしれない、耳が聞こえないのかもしれない、病院に行って治る者は治ったほうがいいのではないという声が聞こえ、一般的におばあちゃんなら…というような感じ方になってた。（認知症だけが特別なものではないという感覚も持てた。）

活動のきっかけや経緯

- 教育学部卒業後、小中学校教員11年の経験を活かし、毎年地域の小中学校等で福祉理解の授業を行う。（社会科として・家庭科として・総合学習としてetc）
- 地域の公民館や民間企業等からの依頼、法人事業で認知症サポーター養成講座を年に数回実施（平成20年～）
- 夏休みの子どもの居場所として、職員に施設開放（平成20年～）
夏休み宿題対策の自由研究で『怖い夢はなぜ忘れられないの？』
『うちのおじいちゃんよく道に迷うのはどうして？』を支援→認知症の理解に繋ぐ
- 平成28年から地域包括支援センターと共に市内全小中学校で認知症サポーター養成講座を開始
- 平成29年6月かすみがうら市教育委員会教育委員就任。いじめ対策としての違いを認め合う教育に、認知症になっても共に暮らせる地域づくりも役立つのではないかと提案。また、学校との連携もスムーズになった（職権濫用…？）

取り組みに際しての工夫

- ・学習カリキュラムの一環として行うので、関連する科目や単元全体の位置づけを確認し、単発の授業とならないようにした。そのため担任教諭との打合せが必要であるため、教諭の時間が取れる時に学校を訪問。
- ・道徳の授業等での「他者理解」の内容とも関連できるように配慮した。
- ・小中学校共に規模が大きく異なるので、学級規模に応じた授業組み立てをする。また、学年・学級の実態に応じた変更も必須。
- ・いかに子どもたちに「身近なこと」と感じてもらえるかが大切であり、学区の特徴やロールプレイ（サンシャイン劇団）を活用。中学校では、教師に役割を演じてもらうことも多い。学校側もお任せ感が減少した。
- ・人数の少ない教室での授業は全員が発言・ロールプレイができるように、大規模校ではロールプレイ等が教室の人間関係に影響が及ばないように担任と調整が必要となる。

	学級数	人数
A小学校	14	381
B小学校	10	256
C小学校	6	85
D小学校	6	97
E小学校	5	60
F小学校	4	34
G小学校	19	624
H小学校	15	487
小学校計		2024
I中学校	11	357
J中学校	5	136
K中学校	17	563
中学校計		1055

・中学校では学年一斉の授業になることがほとんどで、会場も教室ではなく、武道館や体育館などになることもある。系統性のある授業というよりはイベント的なものになってしまう。ほとんどが1年生での授業であるので、翌年2年生での職場体験につながる生徒も多少はいる。

・イベントを生徒の立場になったときに、やり過ごす時間にしないために、学年の先生にロールプレイを協力してもらっている。外部のイベント講師によるイベント授業から少し身近な授業になる…かなと思っている。

・小学校では、サンシャイン劇団による演技は、臨場感を高めるのに役立っている。

・中学校では、考える時間のロールプレイや発表がその後の教室での人間関係（いじめ等）に影響が出ることも容易に考えられるので、慎重かつ楽しく授業ができるように、先生との関係づくり、打合せは必須。その年の学年の雰囲気などで、環境としてのかかわりを考える内容メインから、記憶の仕組みメインなどに変更することもある。・・・会を重ねているので、一度小学校で参加している生徒が大半である。

取り組みの成果

- 「わからないのはしょうがない。怒らない」「できないことは助けてあげよう」という理解から「本当はどう感じているんだろう。こんな言葉でいいのかな」「これはおじいちゃんが本当にやりたいことなの？」「本当はどうしたいの」という理解に変化してきている（活動紹介参照）
- 子どもを通して、家庭でも話題になっていることがある。（学校からの情報、保育園・児童クラブからの情報）話題になることから先に進めることがたくさんあると考える。
- 取り組み当初は、同じ場面でも「その一言、そのかわり」によってご本人の混乱がひどくなったり悪化したりする場面を劇の導入・まとめ部分で紙芝居やスライドショーで見てもらっていた。スタッフ有志とサンシャイン劇団を作り場面を見もらうことにより臨場感が出たため、その後の考えに深まりが出た。

副次的成果として一場面を演じるにあたり、スタッフがご本人の心の動きを理解するために丁寧な観察を行っている。また、子どもたちの発言から、現場スタッフの意識以上に真剣に考えていることに衝撃を受けている。もちろん演技力もup！

取り組みの課題や展望

・認知症カフェでの一コマから

Aさん：小学生の孫も認知症のことよく知ってるんだよ。
学校の勉強にあるらしいよ。

Bさん：少し間違えると『認知症じゃないの?』って言われるんだ
よ。それが嫌なんだよね～』

ちょっとぼけたんじゃない…と言われるのは年をとれば誰にでもあること
でかわいげがあるけど、「認知症」って言われると重病で悪くなるばかり
でもう駄目だと思ってしまう。…とBさん

生活障害が減らせれば、決して「駄目だ」ではなくなることを子どもた
ちも、高齢者も感じて、元気に認知症になれる町にしていきたいと思う。
子どもたちは、ほんの少しずつ理解し始めているように感じる。子どもか
ら大人へ、「大丈夫！」が伝染するように取り組みたい。

・授業の位置づけを明確にし、イベント・単発授業とならないように更なる
連携をとり、法人の事業の中にもサポーターとして子どもたちの活動の
機会を作っていくことが出来たらいいと考えている。そこから地域の活動
につなげることもできるのではないか。